

ここ数年来のスティーブ・キューンの音楽的充実ぶりは、目を見張るものがある。まもなくキューンは70才を迎えることになるが、近年の彼のプレイはそんな年齢を少しも感じさせないばかりか、むしろ以前より若々しくなっているようにさえ思えてならない。何よりも驚かされるのは、ピアニストとしてのキューンが以前には想像すらできなかったような、スケールの大きな力強い表現を聴かせてくれることで、これはピアノ・ジャズのファンにとって嬉しい変化であるといつて良いのではないだろうか。スティーブ・キューンといえば、かつては繊細な感性にもとづくりリカルなプレイを繰りひろげてファンの心をとらえてきたのだったが、そういったキューンが保ちつづけてきた美質はそのままだ、より豊かにメロディーを歌わせるとともに、力強いダイナミックなプレイをおこなうようになってきている。そんなスティーブ・キューンの新作「プレイズ・スタンダードズ」は、タイトルからもわかるように、お馴染みのスタンダード・ナンバーを中心にとりあげたアルバム。誰もが愛している親しみ易いメロディーばかりを、個性的なスティーブ・キューンの解釈で耳にすることができるというわけである。

スティーブ・キューンならではの独特な解釈の秘密は、彼の優れたハーモニック・センスにあると思っている。どんな作品であっても、キューンはハーモニックな創意工夫を加えて、まったく新鮮なものよみがえらせてみせる。単にハーモニーだけでなく、メロディーそのものリズムやアクセントを変化させ、絶妙なセンスで崩してみせる。あるいは自由に裝飾音などを加えたりもするが、そういったものすべてが隠し味のようになって、プレイそのものに、かつてなかったほどの新鮮な響きをもたらすことになっているのである。キューンのオリジナル作品はもちろんのこと、彼のハーモニーについてのセンスの素晴らしさは、スタンダード解釈でもはっきり耳にすることができる。メロディーが親しまれているものだけに、その斬新な感覚をいっそうくっきり感じとることができるというわけだ。これはスティーブ・キューンが、5才の時からクラシックのピアノ・テクニクを学んでいたことと無関係ではないかもしれない。

ここ数年にわたってヴィーナス・レコードからは、「誘惑」や「ワルツ〜ブルー・サイド」「同〜レッド・サイド」「イージー・トゥ・ラヴ」などの秀作が、次々に送り出されてきた。そして2006年には、キューンがクラシックのナンバーばかりにアプローチした「亡き女王のためのパヴァーヌ」もリリースされている。クラシックといってもキューンは、必ずしも曲のもっているイメージにとらわれることなく、あくまで即興プレイを身上とする彼のジャズ演奏のための素材として、一本しっかりと筋の通った演奏をおこなっていたが、同じことが本アルバム「プレイズ・スタンダードズ」にも、そのまま当てはまる。キューンはあくまでピアニストとしての個性を鮮やかに盛り込んで、まぎれもないキューンの音楽として聴かせてくれている。そこが凡百のスタンダード・アルバムとは一線を画す本作ならではの素晴らしさになっている。スティーブ・キューンのもっている音楽に対する真摯な方向性は、ヴィーナスのプロデューサー、原哲夫氏ともびつたり一致するものがあるようだ。“ 僕はいつも、ジャズはエモーショナルな音楽だと思っているんです。ジャズは頭で聴くというより、体で聴くものでしょう・・・”と、原氏がコメントしている。

ベースのバスター・ウィリアムスは、60年代の初め頃から第一線で活躍し、ハービー・ハンコックのバンドで素晴らしいビートを送り出していたこともある大ベテラン。ドラムスのアル・フォスターは、マイルス・デイビスのバンドでの活躍をはじめ、常にトップ・プレイヤーのバックにあって彼ら

- Plays Standards**
プレイズ・スタンダードズ
Steve Kuhn Trio
スティーブ・キューン・トリオ
- アローン・トゥゲザー**
Alone Together 〈A. Schwartz〉(7:16)
 - ゴールデン・イヤリングス**
Golden Earrings 〈V. Young〉(5:31)
 - アイ・ウィッシュ・アイ・ニュー**
I Wish I Knew 〈H.Warren〉(5:59)
 - レフト・アローン**
Left Alone 〈M. Waldron〉(4:07)
 - ブルー・ボッサ**
Blue Bossa 〈K. Dorham〉(5:28)
 - ネイチャー・ボーイ**
Nature Boy 〈E. Ahbez〉(6:34)
 - 朝日のようにさわやかに**
Softly As In A Morning Sunrise 〈S. Romberg〉(6:32)
 - ユー・リーブ・ミー・ブレスレス**
You Leave Me Breathless 〈F. Hollander〉(5:20)
 - オーシャンズ・イン・ザ・スカイ**
Oceans In The Sky 〈S. Kuhn〉(6:18)
 - アイ・シー・ユア・フェイス・ピフォア・ミー**
I See Your Face Before Me 〈A. Schwartz〉(5:28)
 - ラブ・レターズ**
Love Letters 〈V. Young〉(6:50)
 - ビューティフル・ラブ**
Beautiful Love 〈V. Young, W.King, E. V. Alstyne〉(4:35)

スティーブ・キューン Steve Kuhn (piano)
バスター・ウィリアムス Buster Williams (bass)
アル・フォスター Al Foster (drums)

録音：2006年8月30、31日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*
Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in New York on August 30 Æi 31, 2006
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara　Artist Photos by Mary Jane
Front Cover：© Paul Foldes / G. I. P.Tokyo
Designed by Taz

のソロを煽りつづけてきた名手である。いずれもキューンとは気心の知れ合ったメンバーであり、キューン自身も、このトリオを心から気に入っているようだ。

スタンダード・ナンバーを中心にしようということで、アルバムの選曲は、きわめてなごやかな雰囲気の中で進められていった。プロデューサーの原氏とキューンが、ホテルのレストランで食事をしながら、自由にアイデアを出し合う。結局あれもこれもということになって、お互いから提示されたナンバーは30曲ほどにも及んだのだったが、それらの中からスティーブ・キューンがさらにセレクトしたものが、このアルバムで演奏されている。とくに日本のファンだけを意識したわけではないと思うが、結果としてマイナー・キーのナンバーが多くなったというのは、やはり注目すべきところだろう。いま乗りに乗っているスティーブ・キューンだけあって、演奏はきわめてリラックスした、良い雰囲気の中で進んでいった。いくつかのテイクをとったものもあるが、結果としてほとんどの曲で、最初のテイクが採用されたという。

ところで本アルバムの内容を“スタンダード曲集”だと言ったが、ジャズ・ファンにとって大きな、そして嬉しい驚きは、ここで<レフト・アローン>がとりあげられていることだろう。不世出の女性シンガー、ピリー・ホリデイの伴奏ピアニストだったマル・ウォルドロンが、ピリーの為に書いた哀切のバラード。マルのプレイがあまりに個性的だった為に、この曲をとりあげて演奏したプレイヤーというのは、数多くはいない。スティーブ・キューンはあえてこの曲を選び、軽いスイング・ビートに乗せて料理している。近年、テナーのエリック・アレキサンダーなどもとりあげ

ていたが、それはあくまでマルが作曲したオリジナルのムードに沿った演奏になっていた。いったい<レフト・アローン>がどのようにプレイされることを、誰が想像しただろうか。どこまでも深く沈みこんでゆくようなマルのプレイに対して、キューンはほのかな哀感の漂う美しいタッチで、むしろさわやかに演奏させている。マイ・ベースで弾じてゆくキューンのプレイは、マルのものとはひと味異なるペーソスを描き出していて、じつに興味深い。同じくジャズメンのオリジナルでは、黒人トランベッター、ケニー・ドーハムの手になる<ブルー・ボッサ>が演奏されている。ブルーノート盤「ページ・ワン」の冒頭を飾っていた、モダン・ジャズの人気ナンバー。キューンはわずかにテーマのビートをずらしたりしながら、彼自身の個性を加えてプレイしている。ハーモニーに工夫を凝らしているのはもちろんだが、それだけでなくキューンはきらきら輝く幻惑的なフレーズを散りばめながら、途中に“ベサメ・ムーチョ”のメロディーなども大胆に引用して、華麗なボッサ曲として弾きこなしている。スタンダード・ナンバーに話を戻すと、冒頭の<アローン・トゥゲザー>は、アーサー・シュワルツによって書かれた、哀愁を帯びている美しい曲。キューンはあちこちで意匠を凝らしたハーモニーを奏で、メロディーそのものフレッシュに響かせている。サビの部分のフレージングなどもハツとするようなスリルを感じさせてくれるが、このあたりの語り口の上手さは、まさにキューンの真髄といえるものだろう。ヴィクター・ヤングが書いた<ゴールデン・イヤリングス>も、哀愁のメロディーの典型のような作品。キューンは珍しく、ボッサ・ビートに乗せて演じていて、この曲をさわやかな抒情をもって響かせてゆく。ワルツ・テンポで演じられる<ネイチャー・ボーイ>と<ビューティフル・ラブ>は、テーマのメロディーを微妙に変化させてゆくアレンジが面白く、独特のハーモニーによって、フレッシュかつロマンティックな抒情がいっぱいに

ふくらんでゆく。いっぽう名スタンダード曲として多くのプレイヤーたちがとりあげてきた<朝日のようにさわやかに>では、テーマは即興的に大きく崩されていて、おなじみのメロディーはほとんど現われてこない。キューンは硬派のピアニストとして、あくまで即興プレイに終始しており、アル・フォスターの鮮烈なドラミングがキューンのソロをいっそう煽り立てている。パワフルなトリオの迫力に圧倒される一曲である。<ユー・リーブ・ミー・ブレスレス>や<アイ・シー・ユア・フェイス・ピフォア・ミー>のようなバラードでは、スティーブ・キューンのトレードマークのようになっていたリカルな表現の素晴らしさが、くっきりと浮かび上がる。選び抜かれた音だけを使って、美しく響かせてゆくスティーブ・キューン。そのデリケートな表情に、思わずうっとりさせられる。<オーシャンズ・イン・ザ・スカイ>は、アルバム中唯一のスティーブ・キューンのオリジナル。77年に初演されて、89年に制作されたOwl盤のタイトルにもなっていたもので、最近で2004年のウィズ・ストリングス・アルバム「Promises Kept」の中でも演奏されていた。スタンダード中心のアルバムに、あえてこの一曲を加えるあたりからも、キューンにとって特に思い入れのある、お気に入りの一曲なのだろう。ここでの演奏は、オリジナル演奏の密度をさらに上げたようなプレイで、いっそうダイナミックな激しさを増した演奏が展開されてゆく。強烈なうねりをもったエネルギーな演奏。これまた、パワフルな今日のスティーブ・キューンの姿が象徴されているような一曲になっている。

岡崎 正通